

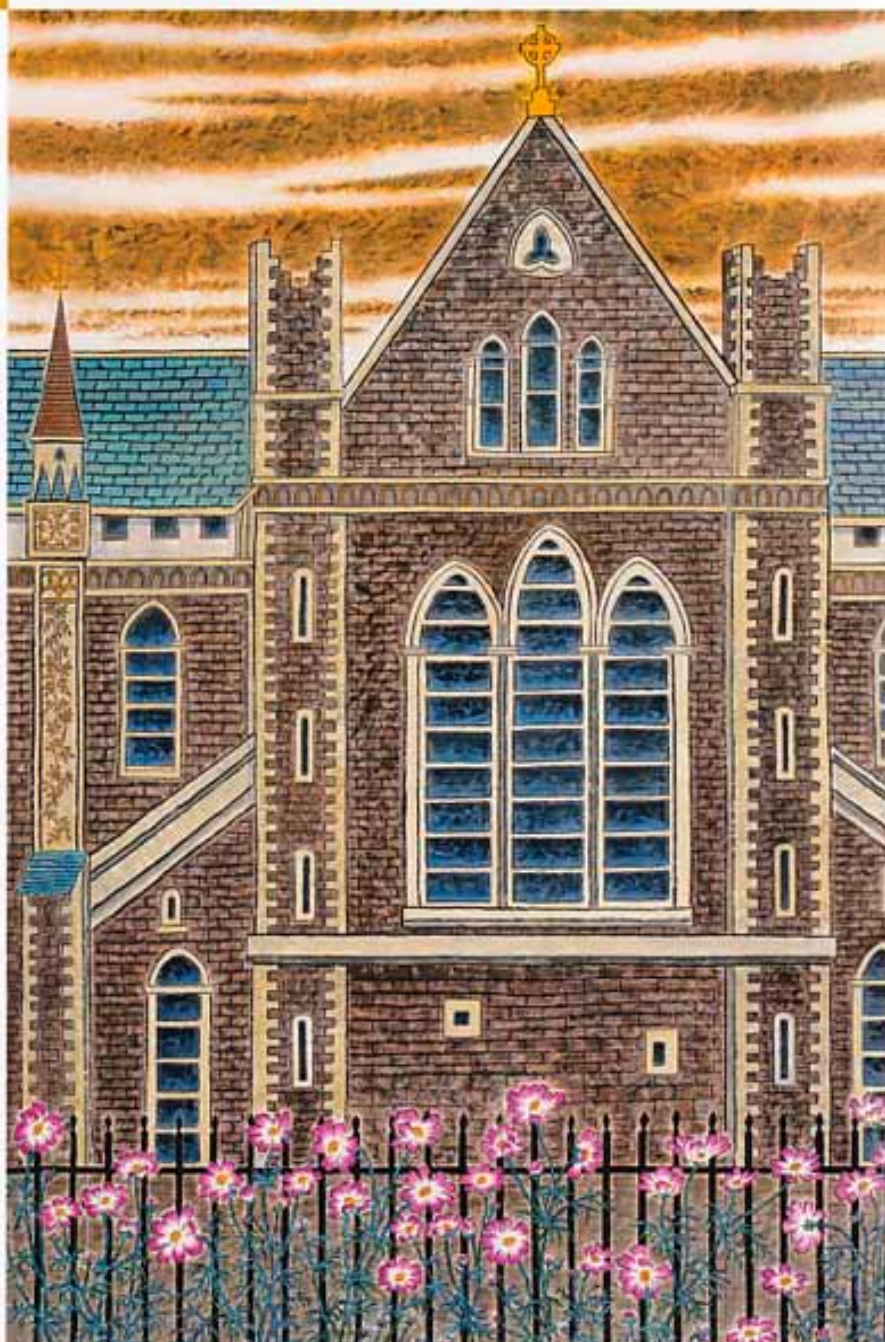
沖

10

2020

創刊50周年記念号

俳句雑誌【沖】



烏瓜花を解きて闇生まる
 白日傘浮き漂うて灯台へ
 晴れ間より日矢の真つ直ぐ兜虫
 黴払やはり贗作かも知れぬ
 箱庭の山河寂びある村雨に

菅貫の縄の切口鋭かり
 照り降りの空明るくて昼寝覚
 果てのなき上総国原青田酔
 潮灼けの喉をしこなせ踊唄
 走り根に沿ひし蟬穴覗き見る

不意打ちの花火一瞬厄払ふ

さばさばと夏百日を籠りゐる

老い少し端居ごころも身につきし

稲の花さゆらぐ音は鈴のやう

青胡桃かの人左利きと知り

喜んで祭喧嘩を買うてやる

甚平の裏紐締めて書に溺る

灯を乞うて窓打つ夜蟬奈落めく

イエスノーどちらでもなく冬瓜汁

寵馬部首たしかめて字を探す

初成りの替紫の棘は旬

ひとり生えせし棘の木の露けくて

悪筆の梶の七葉を弄ぶ

真贋はさておき蔵のお風入れ

ポジティブな船の名前や葉月潮

八朔や電波時計の誤差もどり

馬のゐる片山影の大花野

乱声の経を唱へし川施餓鬼

柱廊を渡り一涼いただけり

高枝のぐいと引きたる喧嘩蔓

秋瀑の白き音色を奏じけり
掃苔の束子織田瓜家紋より
煮浸しの茄子の小鉢は盆の膳
草市で買ふ現世のものばかり
類型の絵のやさしくて走馬灯

意中なる仮想句敵銀河燃ゆ
奥書庫に仕舞ふ全集処暑日差し
追吹のつくつくぼふしつくつくし
管楽器店夜涼の扉閉す音
つまくれなる咲き出で際の釦付け

青竹の繕ひ毀つ川床仕舞

群萩のすがりこころを束ねられ

調律師新涼の音を弾き出し

白扇たたみて決まる一語かな

八月大名てふ自肅の家籠り

八十八の創刊立志曼珠沙華

五十年前の創刊の頃を思ひて二句

炎帝の許創刊の陣備へ

竹筒に筆の林立雨月かな

高塔の点灯五彩秋めきぬ

豊秋の家木の朴を仰ぐかな

物置に薬研錆びある震災忌
 敬礼のひとつもしたき牽牛花
 仕舞には蝮酒出る御師の宿
 甚平の脛に戦の傷のあり
 手拍子に背中押さるる生身魂

聞き耳を風に立てゐる今朝の秋
 新秋の雑魚振り落とす四手網
 深更に青々とある鱚雲
 稲妻に横取りされし妻の貌
 稲光阿吽の仁王甦る

鳳仙花弾かれたくて紅を増す

ほろほろと萩ほろほろと零れけり

燕帰る昨日の空の無かりけり

鳴き砂に混じる砂鉄や海猫帰る

銀漢の尾の触れ佐渡の怒濤かな

何買ふでなく草市に紛れをり

手の込んだ肴にあらず猿酒

街灯をまとふ浮塵子の有耶無耶に

書齋とは逃げ場なりけり昼ちちろ

這ひ這ひの子のがちやがちやと向き合へり

消灯の後がちやがちやの始まれり
がちやがちやの夜の一角を食みてをり
狐花聞きをり野良の立ち話
空席に案山子を立ってて応援す
かなかなや荒るる山河を平らかに
かなかなの鳴き継ぐ全戸灯るまで
秋声を聴き父の声聞き洩らす
反古燃ゆる色なき風に飛び火して
せせらぎのやうに笹より新小豆
秋彼岸母の形見を姉が着て



能村研三 主宰



▲H28.9.17 青葉の森公園にて

主宰・副主宰
近影



森岡正作 副主宰



▲横浜市技能会館にて煤進句会

飛鷹選評

能村 研三

噴水の 水持ちあげて力尽く 中村 重幸
噴水は、暑い最中に一抹の涼気を与えてくれる。様々なしか
けが試みられ、自然落下する水が重力に反したような独特な動
きを現す神秘的な演出もされる。思ったより高く噴き上げられ
る噴水に歓声や喝采の声がある。最大限の演出として高く吹
き上げられた噴水もやがて力が尽きて水の勢いが収まり静寂な
時間を取り戻した。

水打つて濁世を閉ざす 踊り口 宮岡 弘
玄関は、客を迎え入れる場であり、通り道は清浄であること
が求められる。ことに茶室は入る前からも、水との関わりは深
い。茶室へ至る露地は水を打って美しく変貌を遂げる。水分を
含んだ地面や石灯籠はより味わい深く、濡れた樹木の葉はいっ
そう瑞々しい。踊り口は茶室の小さな出入り口で穢れを落とす
地位や身分の高い人も頭を下げて入ることとなる。

海原の銀を引き割き夕立来る 里村 梨郎
里付さんがお住よいの館山はいたるから大海原を望むことが
出来る。海の表情も様々で、季節・天候・朝昼夕と変化が楽し
める。何も遮るもののない大海原に夕立の閃光が走った。一瞬

の閃光は銀色を帯びた大海原に鋭く落ちるように見えた。自然
が描き出す瞬間の景をリアルに捉えた句である。

世を拗ねてゐるかに細るいぼむしり 小倉 征子
いぼむしりとは、カマキリの別名、なんとも奇妙な名前であ
る。カマキリにイボを触らせたり、かじらせたりすると治ると
いう俗説があったからこの名がついた。肉食性の虫で細いから
だでありながら食欲に餌を食べ続ける。いぼむしりの名を活か
して世を拗ねているように捉えたことは面白い。

アガパンサス咲いて夜明けの海の色 浜田はるみ
梅雨の頃から夏にかけて咲くアガパンサスは、青紫色や白の
清涼感ある花色が印象的な植物である。私の家の庭にも咲いて
くれた。長く伸びた茎の先にたくさん小さな花がつき、その
姿は優雅である。夜明けの海の色が似あう花でもあるようだ。

炭風鈴木霊の記憶もて鳴れり 加賀 荘介
風鈴はガラスや鉄でできたものが主であるが、備長炭などの
炭を使った風鈴もある。家の軒先や窓際に炭風鈴を吊り下げる
と、風が通るたびに、優しく美しい音色が心地よく響く。硬く
焼かれた炭には木霊の記憶があり、触れ合って奏でられる水琴
窟のような癒しの響きがある。

「時そば」の扇子の語る蕎麦の味 澤田 英紀
「時そば」は古典落語の演目の一つ。蕎麦の代金十六文を時
刻をたずねながら一文ごまかした人を見て、ある男が真似をす
るが、逆に多く数えて四文損をしてしまう話。蕎麦を食べる仕
草を扇子と手拭いで全てを表現し、扇子を使ってすすめるのも、
実に美味そうに演じる。

蒼茫集



喝 采

千田百里

滝壺の水の喝采誕生日
遠き昭和は我らの旬よ冷し酒
ロビー薄暑向き合うて座し知らぬ人
涙より重たき八月の空気が
鶴髪の晩夏の景として籠る
桐一葉われの一憂載せて落つ

凝視の如く

辻美奈子

みどりごの凝視の如く滴れる
形代もマスクも白し折りけり
*ひとつ木が鳴けばどの木も蟬の木に
競泳の勝者は水を叩きけり
飛込の水底どこまでも深し
夏果ての仏足石の五指平ら

昼 顔

大畑善昭

杜鵑遠鳴きに朝はじまれり
*昼顔は青天井を恋ふる花
風死してけふ一鳥も鳴かざりき
昼寝より覚めすつきりと思考力
藪蚊みて魍魎魍魎も出る処
供花にまづ秋の黄の蝶来て止まる

水の光

田所節子

石寄せて築とす流れ知りつくし
月光の糸とも鳥瓜の花
掬ぶ手に清水の光あふれけり
水浴びてまた迫り上ぐる荒神輿
*水が水押す噴水の力かな
羽ひろげては翔ち惑ふ巢立季

雲 梯

能美昌二郎

雲梯や足裏白き日焼の児
光芒の降る森に聞く滝の音
*滝壺に滝の押し出す風のあり
大滝の音が音呼ぶ山の底
茄子の紺新車のやうに並びをり
足裏の砂攫ひゆく土用波

竹光の照り

成宮紀代子

のうぜんの映えて自肅の路地住ひ
揚花火変りゆく火と一途な火
*太刀魚の竹光の照り延べらるる
冷索麺マリンプルーの切子から
夕涼や深読みをせぬ人と居て
椋鳥渡る学園都市の夕映えに

白 炎

宮内とし子

*注連かかる滝の終りなき白炎
文豪もきつと聴かれし河鹿宿

滑走路

七種年男

梅雨深む鳩の巢籠る鳩時計
*びいどろの溶けゆくやうに瀬戸夕焼
竜神の呑み込むごとく出水引く
夕虹の浦賀水道大跨ぎ
滑走路一直線の炎暑かな
爆心の坂の上なる罫雲

終の雫

菊地光子

*オカリナは縄文の風草は穂に
新涼や沖へと変はる海のいろ
夕映の色たたみゆく白芙蓉
紫に暮れて小名木川の残暑かな
手花火の終の雫のひとゆらぎ
炎昼を来て放心の傘たたむ

潮鳴集



補陀落 森村江風

褐色の声は地の声油蟬
鰻重を待つ間の至福酒一合
強面の崩るる寝顔三尺寝
橋越せば昔色町枯紫陽花
*補陀落や夏満月に舫切る

ソーシャルディスタンス 内山花葉

ホモ・サビエンス香水を鑑とす
付合ひは簾越しなり遠筑波
レモンスカッシュ交歓会はオンライン
塩辛くなつてくる汗黙考す
*ソーシャルディスタンス蚕豆の二つ

陽光 平松うさぎ

真鍮の色して梅雨の果てにけり
*陽光はストップモーション海開
残心の摺り足涼し橋掛り
ぬばたまの闇瑞々し青時雨
墨流し水の自在の涼新た

校正 齊藤實

*蜘蛛の囀の校正もなく出来上る
マネキンの涼しき姿してゐたり
水草に鉛の重り金魚飼ふ
木に熱気あるやも知れぬ夏木立
渡船にも油の匂ひ白日傘

沖作品



能村研三選

三伏や翅ある虫も地を歩み 千葉 中村 重幸

*噴水の水持ちあげて力尽く
マネキンの瞑らざる眼や夏の月

尼の手の焔するどく毛虫焼く
休日の称宜の技冴ゆ蝮捕り

真青なる知覧の空や敗戦日
方便の嘘は是とせむ不如帰
排水門開かぬ諫早海月浮く
教会に針無き日時計浦上忌

*水打つて濁世を閉ざす躪り口
閉ざされし古刹の門の凌霄花

浜食堂の葦簀に並ぶヘルメット
洗ひざらしの印半纏金魚売
枇杷山の軽業師めく袋掛
*海原の銀を引き割き夕立来る

神奈川 宮岡 弘

千葉 里村 梨邨

*世を拗ねてゐるかに細るいぼむしり 福岡 小倉 征子

花木権四五人寄れば鬼遊び
鬼灯鳴らす二枚の舌のあるやうに

磐座へ息をはづます青田風
露涼し菩薩のやうな岩の相
湖の白き回船明易し

*アガパンサス咲いて夜明けの海の色
黄菖蒲や朽舟しんと水に映ゆ
草むらの雨を弾いて黒揚羽
白南風のさざなみ立ちぬモネの池

*炭風鈴木霊の記憶もて鳴れり
紫陽花に昨夜の続きの色うごく
丸め持つ角川文庫青ぶだう
山の子の末だ海知らずあめんぼう
晩歳を生きて悔やまず雲の峰

埼玉 浜田はるみ

神奈川 加賀 莊介